



Data

監督: ジャウム・コレット=セラ
出演: ドウェイン・ジョンソン/エミリー・ブラント/エドガー・ラミレス/ジャック・ホワイトホール/ジェシー・ブレmons/ポール・ジアマティ/キム・グティエレス/ダニ・ロピラ

■ショートコメント■

◆私は東京ディズニーランドに1度だけ行ったことがあるが、人気アトラクション「ジャングル・クルーズ」に乗ることはできなかった。小学生時代にはじめて見学した、奈良の「ドリームランド」の面白さをはっきりと覚えている私は、“その手の遊び”も大好きだから、本作は必見！

ウォルト・ディズニーの子供向け(?)映画の面白さは、『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズ(03年~16年)(『シネマ3』101頁、『シネマ11』20頁、『シネマ15』14頁)を観れば明らかだ。もっとも、同シリーズは敵味方入り乱れた多くのキャラが暴れまわる血沸き肉躍る物語だったが、本作のテーマはただ1つ。それは「不老不死の伝説」だ。

◆『パイレーツ・オブ・カリビアン』の主役は、ジョニー・デップが演じた海賊のジャック・スパロウだったが、そのストーリーの中には常にキラー・ナイトレイ扮するエリザベス・スワンがいた。それと同じように、本作の主人公はジャングル・クルーズの船長フランク(ドウェイン・ジョンソン)だが、ストーリーの核は“クリスタル(月)の涙”と呼ばれる“奇跡の花”を求めためにやってきたイギリス人の女性医師リリー(エミリー・ブラント)になる。

破天荒な両主人公のキャラが“売り”になっているのは両作とも共通だが、全く違うのは『パイレーツ・オブ・カリビアン』のエリザベスは美しいドレス姿が“売り”だったのに対し、本作のリリーはパンツ姿が“売り”であること。2人の年齢差はさておき、両美女の活躍度の比較も面白いのでは？

◆「ジャングル・クルーズ」に同行する弟のマクレガー(ジャック・ホワイトホール)がイギリス紳士らしい正装であることに比べれば、リリーのパンツ姿は異様だから、彼女に雇われた船長フランクはリリーのことを「パンツ」と呼ぶほどになるほど、なるほど・・・。

それも面白いが、もっと面白いのはアメリカ初の女性大統領と期待されたヒラリー・クリントンとはあつかわずかのところで夢が阻止されてしまったのに対して、エミリーの夢はどうなるのかということ。リリーはあの時代の女性の枠を大きく超えたキャラと行動力の持ち主だから、ひょっとして・・・？

◆ジャングル・クルーズは、ウォルト・ディズニー氏が南米コロンビアの川をさかのぼった経験のもとに構想されたそうだが、それをアトラクション化するには、アマゾン川、ナイル川、イラワジ川を参考にし、出現する動物たちもそこら辺りの生き物にしたらしい。したがって、そのアトラクション化については「何でもあり！」だが、それはジャングル・クルーズを映画化するについても同じだ。

本作では、第1に「伝説に近づく者は呪われる」と言われている伝説がスクリーン上に登場するので、それに注目！“アメリカ大陸の征服者”という肩書を持つ男アギーレ（エドガー・ラミレス）はその呪いにかかって石にされてしまったそうだが、さてその姿は・・・？そして、第2にリリーと同じく“奇跡の花”を求める“敵役”として、何と「Uボート」ならぬ小型潜水艦に乗り込んだ、ドイツ帝国の王子であるヨアヒム（ジェシー・プレモンス）が登場してくるので、それに注目！その残忍さと共に、いかにもドイツ人らしい（？）発想と団体行動の在り方は？

◆本作のクライマックスになる舞台は、アマゾンの上流奥深くにある「クリスタルの涙」だが、そこでの最終決戦は如何に？それを楽しむためには、導入部における、フランクとリリー、マクレガーの3人+1匹のトラ（ネコ？）による「ジャングル・クルーズ」結成のストーリーからじっくりと楽しみたい。たまには、理屈抜きでこんな楽しい映画もいいもの！そして、こんな楽しい映画には、これ以上の評論は不要だろう。

2021（令和3）年8月20日記